

日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No. 7

『大量の祭具が納められた祭りの跡』

金井東裏遺跡の3号祭祀遺構は、調査を始めた時には土器が少数出土した程度でしたが、調査を進めるうちに、膨大な数の土器片が次々と出土し始めました。5世紀後半から6世紀前半に榛名山東麓を中心として多量の土器を重ね置きして配置する祭祀の風習があり、この遺構もその可能性が高いと考え調査しました。



3号祭祀遺構の調査風景

土器は、窯で焼いた当時の最新式の土器である須恵器を中心に据えて、南に向かって開いたコの字形で大型土器の壺・甕を中心に150個ほど配置します。その南側に1万個近い祭具を埋納します。更に南東に杯(食器)を中心にした小型土器を700個ほど、10〜20段積み重ねていきます。この土器は、飲食を行った際の食器で、それを重ね置きして片付けたものと考えます。その後、小型の土器の中に、白玉・ガラス玉・鉄器・石器・模造品などの祭具を多く入れた杯皿を中心にした土器が単独で50個ほど置かれます。先ほどの積み重ねの土器とは異なり、祭祀に使用した祭具をそのまま土器の中に置いています。最終的に、900個の土器、9900個の白玉、1面の鏡、86個の玉類、209個のガラス玉類、158個の石製模造品、183個の鉄器と、全国的に見ても非常に多くの土器と祭具が出土したのです。

土器の数だけならこれより多い例はありますが、鏡を始めとする祭具の数がこれだけあるのは、沖ノ島などの国家的祭祀を除き、ほとんどありません。これほどの祭具を使用して行う祭りとは、榛名山二ツ岳の噴火の前兆を見て、その怒りを鎮めようとした祭祀であったと想定しています。

(群馬県埋蔵文化財調査事業団 杉山 秀宏)